宇和島闘牛を支える牛と人

熱狂の舞台裏

着実に進める大切な年に

食料としてだけではなく、農作業や運搬の労働力などで、昔から人の生活に欠かせない存在の牛。そしていつしか宇和島に根付いた闘牛。今では、闘牛を観戦できるところは四国では宇和島だけです。

2021年は丑年。十二支の動物の中でも動きがゆっくりとしたイメージの丑ではありますが、先を急がず一歩一歩着実に物事を進める大切な年とも言われます。今回は丑年にちなんで、宇和島の文化「闘牛」を特集します。

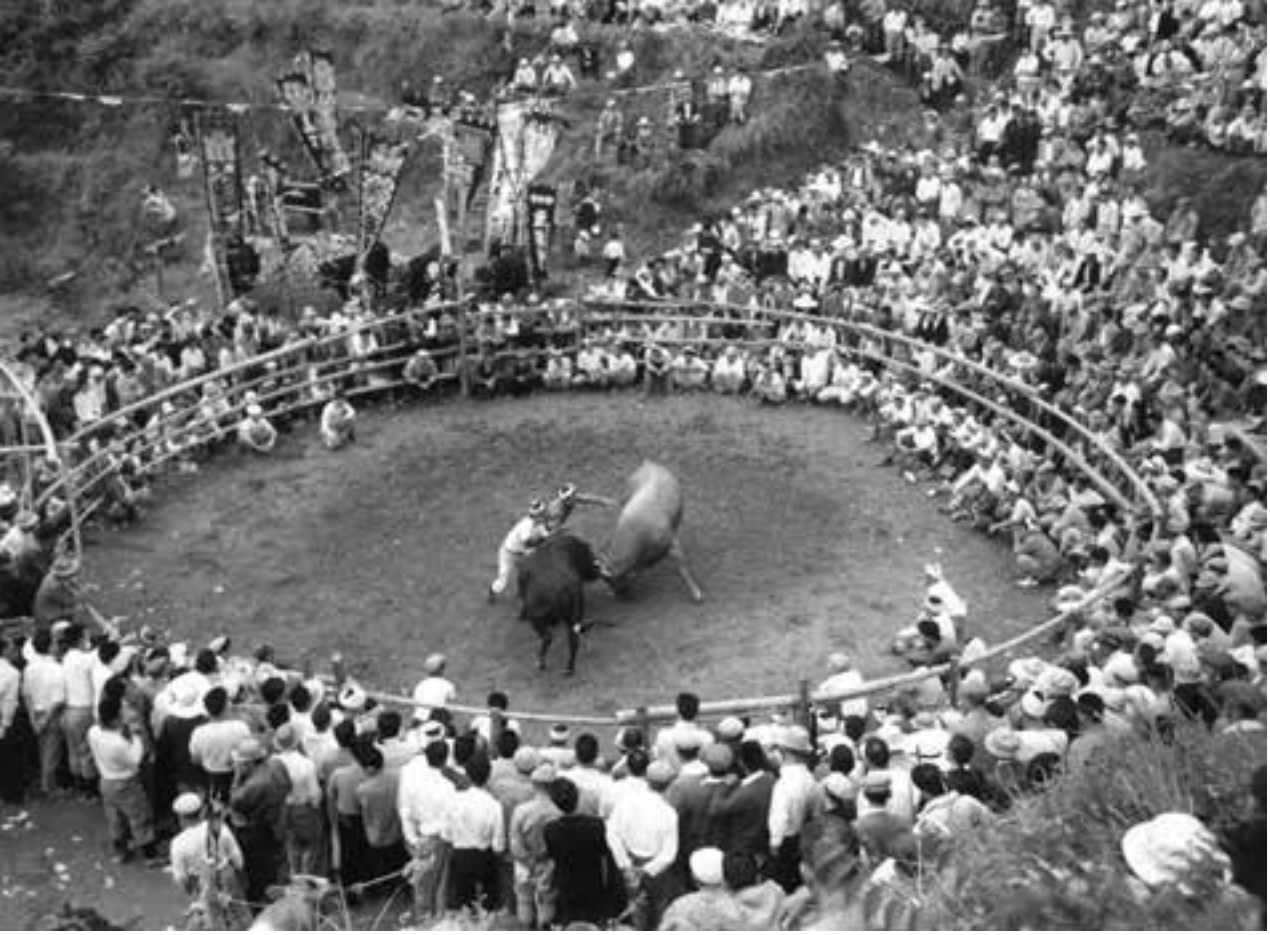
牛のトレーニングでは、300kgあるタイヤを持ち上げ首を鍛える。

蹄を守るナイロン性の牛の靴。編める人は市内でも数少ない。

【闘牛の起源】

鎌倉時代に農民が農耕用の強い牛をつくるために野原で角突き合わせをしたのが始まりとする説と、17世紀後半に宇和海を漂流していたオランダ船を福浦の漁民が救助した礼として２頭の牛が贈られ、この牛がたまたま格闘したことにより始まったとの説があります。

頭を突き合わせる瞬間の鈍い音が、人々を熱狂に引き込む合図。



昭和40年代後半。南楽園に行く手前にあった闘牛場。昔は各地区に闘牛場があり、毎場所会場を埋め尽くすほど熱狂していました。

宇和島の日常にある闘牛

宇和島に古くから伝わる闘牛文化。娯楽が少ない時代に、大衆の楽しみとして親しまれてきました。その激しい戦いに人たちは魅了され、いつしか宇和島の文化として根付きました。闘牛を観戦できる場所は国内で6県9ヵ所しかなく、四国では唯一宇和島だけとなっています。

宇和島では、丸山にある市営闘牛場で年5回（1・4・7・8・10月）大会が開催されています。1トン近い巨大な牛が、土俵で頭を突き合わせた瞬間―。その鈍い音を合図に、観客は戦いに引き込まれいつの間にか熱狂しています。

土俵で繰り広げられる激しい戦いに注目が集まりますが、その戦いの裏では多くの人が携わり闘牛文化を支えています。

個性溢れるリングネーム。それぞれに特別な想いが込められている。

宇和島闘牛の、土俵裏

毛並みや蹄のケアに至るまで牛主が毎日手塩にかけて育てる。

闘牛の散歩。道路を歩く姿も宇和島の日常の風景（津島町増穂）。

土俵での姿からは想像できないほど普段はおとなしい牛たち。

勝負所を見極める

土俵で舞う「勢子（せこ）」の姿

土俵では、牛主たちが育てた闘牛が戦いを繰り広げ、その迫力は見る人の目を惹きつけます。しかし、そのすぐそばで欠かせないのが勢子の姿。

大声で牛を鼓舞する激しいその姿とは裏腹に、冷静な目で牛の様子を伺い勝負どころを見極めます。

牛と呼吸を合わせて土俵を盛り上げる、勢子を紹介します。

牛と少し距離を置き足踏みや声掛けで指示を送ることもある。

牛の首元に寄り添うのが宇和島流の勢子の形。

牛と勢子が一体となり盛り上げる。

牛の舌が見えたらスタミナ切れが近い証拠。その変化を逃さないのが勢子の腕の見せどころ。

呼吸を合わせる名脇役

牛と一緒に土俵に上がり、牛をコントロールするのが「勢子」。競馬の騎手のような存在をイメージすると分かりやすいかもしれません。

戦いの最中も闘牛の首元に寄り添うのが宇和島流の勢子です。押し引きが重要とされる戦いで、牛と呼吸を合わせて一体となり、チャンスを逃さずたたみかける―。勢子は脇役として闘牛を支えています。

闘牛の勝負は勢子の腕で決まることもあると言われるほどその役割は重要です。戦いの中で大きな声を上げて牛を鼓舞しながらも、相手の牛の状態を見極めます。牛はスタミナが切れてくると、舌を出したり糞や尿などをしたりと変化があるのでそこを見逃さず一気に攻める。そこで勝負が決まることもあります。

勢子会長の三曳 正志 さんは、「闘牛も競馬と同じで、人の存在が欠かせません。馬だけがただ走るだけではつまらないのと同じように、牛同士がただ戦うだけでは盛り上がりに欠けます。大会を盛り上げるためにも、勢子の役割は大変重要です。宇和島流の勢子は牛との距離が近く危険とは常に隣り合わせです。それでも、喜んでくれるお客さんの笑顔を絶やさないために、安全には気を付けながら宇和島流の勢子の形を大切にしていきたいです」と話します。

三曳 正志 さん

勢子会長。津島町増穂地区で、牛主として代々受け継がれている三曳家。正志さんの初土俵は高校生のころ。勢子の魅力を知る第一人者。

我らが「闘牛」ファン

一度取り込まれたら忘れられない、それが「宇和島闘牛」。

(左)アツシ君 (右)コウヤ君

小さな闘牛トレーナー

池田さんは、オーナーである牛主の牛を預かって育てるベテラントレーナー。365日闘牛へ愛情を注いでいます。トレーナーとして牛主の牛を預かるのはとてもプレッシャーがかかることです。池田さんは、「高校野球の監督と同じで、試合に勝てば牛が褒められるけれど、試合に負けたときはトレーナーが責められます。しかし、勝ったときの嬉しさで虜になる」と話します。

池田さんの孫コウヤ君とアツシ君は、池田さんが育てる牛の大ファン。2人は3歳のころから牛舎に通い、週末には必ず遊びに来てエサをやったり散歩をしたりと闘牛が大好きです。初めて自分が世話をする牛が負けたときは、ショックのあまり帰りのトラックに鍵を締めて閉じこもり、大人たちが帰れずに困ったそうです。

「闘牛は強くてかっこいいから好き」と話すコウヤ君とアツシ君。この2人の若い芽が、将来土俵に立つ姿に期待が膨らみます。

コウヤ君、アツシ君が育てる闘牛。注ぐ愛情は大人顔負け

池田 定彦 さん
津島町増穂地区のベテラン闘牛トレーナー。高校時代から闘牛に携わっている。孫のコウヤ君とアツシ君は大の闘牛ファン。牛の散歩やエサやりのため毎週のように牛舎に通う。

Interview

三曳　一美 さん

宇和島観光闘牛協会会長 。牛と言えば三曳ともいわれ代々牛主として携わる。牛主兼トレーナー。ときには勢子として土俵で戦う。

末永く残したい

津島町増穂地区では、40年ほど前までは道路を挟んだ両脇に牛が並ぶ光景も珍しくありませんでした。当時は強い牛を自慢したいという思いもあり、勝つことに強くこだわって牛を育てていました。相性や牛の調子によっては、負けを避けるため大会に出場しないということもありました。それでも、昔は今の10倍くらいの数の牛がいたこともあり、出場しなくても大会は成り立っていました。

最近では牛も20数頭しかおらず、年5場所すべてに出場することも少なくありません。そのため、牛が傷つくと大会に出られなくなり大会の開催も危ぶまれます。今では勝つことだけではなく、牛に大きなダメージが残らないように、牛を守ることも強く意識するようになりました。それも、大会を楽しみにしてくれているお客さんがいるからです。

昔は男性のファンが多かった闘牛ですが、最近では子どもや女性のファンも多くなってきていてすごく嬉しく思います。コロナで大変な時期ですが、感染防止や大会の安全な運営を心がけて今後も末永くこの文化を残していきたいです。

はじめての人には、　オンラインもオススメ！

みんなで一緒に自宅で観戦しよう！

■オンライン闘牛

コロナ禍で、毎年１月２日に行われる正月場所も入場制限がされています。新しい取り組みとして、自宅で闘牛観戦ができるオンライン闘牛が行われます。

戦いの模様を実況中継し、初心者向けのわかりやすい解説で闘牛を楽しめます。

【と　き】１月２日㈯ 正午～午後２時（開場：午前10時）
【料　金】1,090円（トウギュウ価格）
※新型コロナウイルス感染症の状況により、大会自体が中止となる場合があります。

＼申込みはこちら／

坂本 健二 さん
市営闘牛場の管理や大会で実況を担当。闘牛の生き字引ともいわれるほど、闘牛に詳しい。

宇和島の「舞台裏」

皆さんが最後に闘牛を見たのはいつでしょうか。毎回楽しみにしている人、しばらく観戦していない人。もしかしたら、まだ見たこともない人も大勢いるかもしれません。

大会ではつい激しい戦いが繰り広げられる土俵に注目してしまいますが、その裏側にある、闘牛たちの普段の素顔や日常の世話に関わる人たちの姿に注目すると、また違った魅力を感じることができます。

闘牛だけではなく、宇和島に住んでいてもまだまだ知らない裏側がきっとあるはずです。牛の歩みの様にゆっくりと少しずつでもいいので、２０２１年は「宇和島の舞台裏」を見つめ直す年にしてみてはいかがでしょうか。新たな発見が待っていることでしょう。